（１）

古希を迎えた父の初めての海外旅行先は 1 でした。海外には行きたくないと言っていた父を連れ出すには１年かかりました。でも 2 が趣味の父は、シンガポールは多民族国家で街のいたるところに絶好の撮影ポイントがあると知って、やっと重い 3 のでした。シンガポールにはマーライオンしかないと思われがちですが、それは行ったことのない人の解釈です。ヒンドゥー教の色とりどりの人形や牛があしらわれたお寺、金と赤で飾り付けられた中国のお正月、たまねぎをのせたようなイスラム教のモスク、サリーを着た美しいインドの女性、熱帯の植物、バラエティ豊かな食事…。挙げたらきりがありません。でも、私が一番好きなのは住んでる人たちがとても優しいところです。タクシーの運転手さんは中国なまりやインドなまりの英語で一生懸命私たちの質問に答えてくれます。また、富の噴水への行き方がわからず 4 いたらひとりの青年が声をかけてくれました。「困っているか？迷子になったか？」突然日本語で 5 びっくりしましたが、いい大人に「迷子」とは…。後からみんなで大笑いしましたが、あの青年の親切に心がとても温かくなりました。

父は写したいところがたくさんあって忙しいなどと、うれしそうでした。母と妹は買い物を満喫し、私たち家族は本格的な中華料理でお腹を満たし、あっという間の４日間でした。

（杉山嘉子　『父の初めての海外旅行』による）

１、

１．多民族国家　　２．シンガポール　３．マーライオン　４．海外

２、

１．運転　　　　　２．人形　　　　　３．英語　　　　　４．カメラ

３、

１．腰をあげた　　２．足があがった　３．目が合った　　４．顔が利いた

４、

１．はらはらして　２．べこべこして　３．うろうろして　４．ちやほやして

５、

１．声をかけられて　　　　　　　　　２．音に聞かれて

３．息がはずんで　　　　　　　　　　４．　気がたるんで

答案：2 4 1 3 1

（２）

百獣の王に檻や柵は似合わない。水をたたえた堀のすぐ向こうを歩くライオンは目と目が合ってしまうほど近い存在だ。「通常、ライオンは一日20時間の睡眠をとります」！？看板の説明とは 1 に、今日の「キング」の動きはすこぶる活発だ。折しも晴天の日曜日である。動物園日和とばかりに繰り出してきた何人もの小さな観客とその親たちを前に、気が立っているのだろうか。右へ、左へ、水際ギリギリをひっきりなしに徘徊しては吠えている。 2 。

 3 、母さんライオンは、平和に昼寝中。午後の日差しの浴び過ぎを防ぐかのように、ちゃっかり木陰の一等席を確保している。時折「キング」が近寄って来ても、声ひとつ上げず軽く流すだけである。息をのんで見つめる観衆を尻目にあくまでマイペース様子は、まるでどこかの家でみるひとママのよう。典型的な、 4 が対照的なカップルだ。

視線を再び 5 へ移すと、相変わらず不機嫌そうにうなりながら、落ち着きなく振る舞っている。半ば開いた口は、今にも舌なめずりしそうだ。こちらに向かってのしのしと歩みを進めてくると、堀があるのも忘れて後ずさりしたくなる。「一日40キロの肉を食す」と書いてあったではないか。思わず骨を除いた自分の体重を計算してみる。

（久米由美　『ベルリン動物園』による）

１、

１．臆病　　　　　２．裏腹　　　　　３．円満　　　　　４．気障

２、

１．不穏な雰囲気だ　　　　　　　　　２．緩やかな気分だ

３．荒っぽい言葉遣いだ　　　　　　　４．快いの空気だ

３、

１．おまけに　　　２．それなのに　　３．一方　　　　　４．そうして

４、

１．進化と退化　　２．美と健康　　　３．絶望と希望　　４．静と動

５、

１．オスライオン　２．メスライオン　３．子ライオン　　４．管理員

答案：2 1 3 4 1

（３）

　新聞やテレビの天気図には、日本の南海上に夏の太平洋高気圧がドンと横たわっていることだろう。天気図をよく見ると、高気圧の西の端が上の方にピョンと持ちあがっていたりすることもある。この盛り上がっている部分が 1 のように見えることから、「クジラの尾型天気図」とも呼ばれている。

　この呼び方は戦前からあったようだが、当時は 2 の範囲が今よりもずっと狭かった。夏の高気圧はかつて「小笠原高気圧」と呼ばれ、高気圧の中心が日本のすぐ東にあるようなイメージが強かったのである。 3 実際の中心はもっとはるか東のほう、ハワイ諸島付近にある。日本付近は北太平洋に広がる大きな高気圧の、いちばん西の端に位置するにすぎない。広範囲の天気図を初めて見た時は驚かされた。クジラの尾っぽだけだと思っていたら、巨大な胴体もちゃんとつながっていたのだから…。

　「クジラの尾型天気図」になる時は、上層で太平洋高気圧と大陸方面の高気圧とがタッグを組んでいる。つまり高気圧の勢力がこの上なく強まっている 4 、安定した夏空が十日前後は続くことが多い。こういう時は台風もなかなか日本列島に近付けないので、旅行の計画も 5 だろう。カンカン照りの猛暑にはなるが、上空からダイレクトに空気が降りてくるので、それほど湿っぽい感じもないはずだ。

（森田正太　『新観空望気』による）

１

　　１　クジラ　　　　２　しっぽ　　　　３　クジラの尾　　４　巨大な胴体

２

　　１　高気圧　　　　２　天気図　　　　３　太平洋　　　　４　大陸

３

　　１　すなわち　　　２　および　　　　３　ところが　　　４　だからといって

４

　　１　はずで　　　　２　もので　　　　３　ところで　　　４　わけで

５

　　１　立てやすい　　２　崩壊する　　　３　穴だらけ　　　４　予定通りに行った

答案：3 2 3 4 1

（４）

近頃の若者はたいていイタリア料理が好きでパスタに詳しく、やれカッペリー二がどうだのフェトチーネが何だのとうるさい。それはそれで結構なことだが、いくらイタリア麺の構釈はできても日本の伝統的な麺文化に無知というのではみっともない。

小麦粉なを原料とする乾麺に干しうどん、干しひらめん、冷や麦、素麺の四種がある。それぞれどう違うか。そんな常識も持ち合わせないようでは日本人として 1 。

結論からいえば、乾麺のうどん、冷や麦、素麺の違いは単に「太さ」だけ、である。太いのがうどん、細いのが 2 、その中間が冷や麦だ。ひらめんは形状がことなり、名の通り 3 からすぐわかる。

ちなみに、ここでいう素麺は機械打ちのものを指し、昔ながらの手延べ素麺はまったくの別ものとして日本農林規格でも別扱いとなっている。

もともと素麺と冷や麦は、製法上に大きな違いがあった。素麺は小麦粉を食塩水でこねてから、油を塗りながら手で細く長く延ばして作る「手延べ」が本来である。 4 冷や麦は、小麦粉を塩と水でこねるまでは素麺と同じだが、素麺にする段階では麺棒を使って薄く打ち延ばしてから庖丁で細切りにする。その点ではうどんと同じ「手打ち」である。

そういう素麺と冷や麦の区別があいまいになったのは、製麺機による機械打ちが発達したからだった。いまや 5 を調節するだけで素麺、冷や麦、うどんを思いのままに生産することができるご時世である。

（佐藤隆介『冷や麦』による）

１

　　１　かなわない　　２　しぶとい　　　３　恥ずかしい　　４　なまぬるい

２

　　１　乾麺　　　　　２　うどん　　　　３　冷や麦　　　　４　素麺

３

　　１　平べったい　　２　四角い　　　　３　あくどい　　　４　まんまるい

４

　　１　それによって　２　これに対して　３　それにしても　４　それなのに

５

　　１　厚さ　　　　　２　甘さ　　　　　３　塩加減　　　　４　太さ

答案：3 4 1 2 4

（５）

日本では夏は怪談シーズンで、幽霊、つまりお化けが主役の怪談を読んだり芝居、映画を見て背筋をひやして暑気払いをする―――というのもいまや昔語りとなってしまった。

冷房がいき渡っているから、お化けも出番がなくなったのかもしれないが、冷房などを家庭で必要としない英国ではＧｈｏｓｔは昔ながらの人気ものだ。 1 、日本とは対照的に冬がゴースト?シーズンで、本屋でもゴースト?シーズンがよく売れるとのこと。

「何で 2 にゴーストか？」と英国のゴースト?ファンの友人にたずねてみたら、「寒い部屋で、毛布をかぶりながらかなりを暗くして読むと実感がわいてくるからさ」という答えが返ってきた。

所変われば品変わるというが、日本でまったく考えられないゴースト人気、それは不動産売買で、 3 不動産は高く売れるということだ。

私は英国に駐在していたとき、アパート探しで不動産屋が当然のことのようにゴースト人気のことを話してくれたのにはいささか驚いたが、パブなどでもゴーストが出るパブは人気があるそうだ。

ゴーストが出ることで有名な観光スポットは「ハンプトン?コート」で、ゴーストは国王ヘンリー８世の５人目の王妃で国王によって斬首の刑に処せられたのを恨んで出没するというのだ。

王妃キャサリン?ハワードが出没する場所は「ホーンテッド?ギャラリー」で、ここを通るとヒューヒューという不気味な音が聞こえてきて人影のようなものが通りすぎ思わず寒気がする―――という「体験談」がつい最近まで語り伝えられてきたのである。

 4 21世紀に入って、化け物退治師を自称するある博士が徹底的なハンプトン?コート?ゴースト研究を行った結果、問題の幽霊廊下は天候によりスキマ風が吹き込んで 5 ことが判明し、人影が現れるのは幻影であるとの結論に達し、ゴースト伝説は事実上否定されてしまった。

（倉田保雄『英国人のゴースト嗜好』による）

１

　　１　とはいえ　　　２　しかも　　　　３　もしくは　　　４　なぜなら

２

　　１　暑い夏　　　　２　暖かい春　　　３　涼しい秋　　　４　寒い冬

３

　　１　化け物が見える　　　　　　　　　２　人気がある

　　３　日本人が知らない　　　　　　　　４　ゴーストが出る

４

　　１　そうでしたら　２　その反面　　　３　ところが　　　４　だから

５

　　１　幽霊があらわれる　　　　　　　　２　王妃が恨んでいる

 ３　不気味な音をたてる　　　　　　　４　冷房が壊れた

答案：2 4 4 3 3

（６）

秋田に限らず東北地方には曲がり家があちこちにあるが、それらの多くは土間を継ぎ足し継ぎ足しでひろげていったらたまたまＬ字型になったっていう感じのものだ。例えば、一生懸命たんぼ仕事をしてくれる馬を冬にそのまま外に置いておくのは忍びないから、じゃあ、ちょっと 1 でも作ってやるかとかそういうことだ。

草彅さんちの曲がり家は他とかちょっと違う。最初からこういう形の家として建てられた。主家と土間をそれぞれ建てて、とおりと呼ばれる廊下で繋いだ。南向きの一番光が差し込む特等席はうまやにあててある。いかに馬を大切にしていたかがわかる。

ところが家の前でしばらく考え込んでしまった。どこに玄関があるのかかわらない。 2 の建物の内側はどれも同じような引き戸が並んでいるだけで、普通玄関に感じる『さあいらっしゃい』みたいな場所が見当たらないのだ。『 3 』ってがらがらっと引き戸を開けて入りたかったのだけど、仕様がないのでインターフォンでぼそぼそと来訪を告げる。

一歩敷居をまたぐといきなり一面の障子が目に入る。あれ、玄関から入ったはずなのにと面食らったが、そこがちょうど主家と土間を繋ぐとおりだった。障子を開けると、ドーンとピカピカ板張りのダイドコが開ける。何と広さ28畳！ 4 天井ぶちぬきで一気にジャングルジムみたいな屋根裏までが見渡せる。何だか宇宙船にでも乗り込んだような気持ちになった。

ダイドコといったからといって、流し台やコンロみたいなものが置いてあるわけじゃない。いろりのある部屋のことをこのあたりではダイドコと呼ぶ。もちろんむかしはそのまま台所の役目も果たしてはいたが、別棟で料理するようになった今も呼び方は 5 。

（臼木みち『くらしのかたち』による）

１

１　居酒屋　　　　２　馬の寝場所　　３　スキー場　　　４　ベッドの置き場

２

１　Ｍ字型　　　　２　Ｓ字型　　　　３　Ｈ字型　　　　４　Ｌ字型

３

１　いらっしゃいませ！　　　　　　　２　ごめんください！

３　おまちどおさま！　　　　　　　　４　おきのどくに！

４

１　ようするに　　２　それとも　　　３　ところで　　　４　しかも

５

１　そのままだ　　２　特別だ　　　　３　変った　　　　４　間違えってる

答案：:2 4 2 4 1

（７）

この旅の間ずっと僕たちの車を運転してくれていたカルロスも生粋のカリオカだ。ただし、彼はカリオカにしてはかなり真面目なタイプらしく、ビーチを歩いていて、人妻風の女性に流し目をおくられたりすると「最近の 1 のモラルの低下はひどいもんだ」と本気で嘆いたりする。リオのカーニバルでも何人もの女性に言い寄られて困ったらしい。「俺には嫁さんがいるんだ！」。カルロス、熱い男である。

ところが、そんあ真面目なカルロスでさえもサッカーとなると目の色が変えて話し出す。ちなみに彼は熱烈なフラメンごファンだ。 2 、ファミリーでサッカーチームも持っている。ポジションはディフェンダー。やっぱり熱い男である。

世界中のサッカーファンにとって憧れの場所、世界最大のスタヂアム、マラカナンでゲームを観る 3 、僕らはカルロスの運転する車に乗った。ちょうど僕らが滞在していた時期は、リベルタドレス杯といって南米のクラブチームＮＯ．１を決める大会の予選が行われていた。しかもこの日のカードはフラメンゴ対ルミネンセ。ともにリオのチームである。

ゲーム開始の30分前にスタヂアムに入って 4 客席にまず驚いた。それじゃのんびり何か食べながら観戦するかと売店へいってみてもポップコーンくらいしか売っていない。すべてのブラジル国民に愛されているはずのサッカーってこんなものだったのかと気が抜けて席に戻ってみると、かなり人が増えてきている。後で聞いてみると、中ではまともな 5 し、酒も売っていないのでみんな外で試合直前まで騒いでいるらしい。

１

１　男性　　　　　２　女性　　　　　３　国民　　　　　４　花嫁

２

１　もっとも　　　２　というのは　　３　つまり　　　　４　それに

３

１　ために　　　　２　どころか　　　３　けれども　　　４　といえども

４

１　おおぜいの人がいる　　　　　　　２　ほとんど人がいない

３　一人もいない　　　　　　　　　　４　満員の

５

１　運転手もいない　　　　　　　　　２　食べ物もない

３　スコアもできない　　　　　　　　４　場所も見つけられない

答案：2 4 1 2 2

（８）

宮古諸島のひとつ伊良部島を訪ねて、南の島々を渡る鷹の物語に魅せられた。きっかけは、ガイドブックに、不思議な形の建物の写真を見つけて興味を抱いた。ル?コルビジェ風の直線と曲線で大胆に構成された神殿に見えたが、解説にはサシバという渡り鳥の姿を模した展望台とあった。見に行ってわかったのは、建物は海と宮古島が見晴らせる崖の上に建ち、翼をひろげた島を象形していた。コンクリートの翼なのに、いまにも飛翔しそうな勢いが伝わってきた。 1 、サシバという渡り鳥のことが知りたくなって、島で調べたのだった。

 2 とは鷹の一種だ。分類学上はワシタカ科のサシバ属に分類され、日本列島の秋田以南と中国東北部、朝鮮半島北部を繁殖地とし、東南アジアの島々で越冬する。サシバが渡ってくるのは９月下旬になってから。本土の各地に分散していたサシバはまずは、南下をはじめると、松尾芭蕉が「鷹ひとつ見つけてうれし伊良湖岬」と句に詠んだ愛知県伊良湖岬に 3 。そこが第一番目の集団休息地となる。そこから、平均飛行時速40キロメートルで一日約12時間飛んで、 4 のポイントである鹿児島県佐多岬に渡る。その先は島々となる。奄美大島近くの徳之島が第三番目のポイントとなり、宮古諸島には、毎年10月10日前後の２週間にわたり、連日やって来る。

地元の人に聞いたところによると、ある日、太陽が輝く空高くに突然10羽ほどのサシバが偵察隊のように姿をあらわすそうだ。そのとき島の人たちは天に秋のはじまりを見る。以後、20羽、50羽、200羽と数を増やしながら 5 。サシバは島で一夜休息すると翌朝、陽の出とともに遠くはインドネシアまで、南の島々を渡ってゆく。宮古諸島では伊良部島と下地島に一番たくさん飛来し、２週間で３万羽が島に舞い降りて休息する。

１

１　それどころか　２　だったら　　　３　そうすると　　４　それで

２

１　サシバ　　　　２　コルビジェ　　３　渡り鳥　　　　４　インドネシア

３

１　飛んでいく　　２　集まってくる　３　引きずっていく４　出てくる

４

１　第一番目　　　２　第二番目　　　３　第三番目　　　４　第四番目

５

１　煌煌と輝いている　　　　　　　　２　続々とやって来る

３　ずるずると延ばされている　　　　４　はらはらと落ちている

答案：4 1 2 2 2

（９）

ハワイに旅すると、たとえ小さなお土産屋さんであっても、必ずといっていいほど「ハワイアン?キルト」を 1 。

ハワイアン?キルトの特徴は基本的に無地の布２枚を使い、デザインが独特なことだ。デザインのモチーフは、ハワイ独自の樹木や鳥、花や草など自然のものだけに限られている。絵柄は切り絵に似ている。型紙は紙を四角く折り、書いた線の通りに切り、ぱっと広げたものなのだ。こうしてできあがった型紙にあわせて切った布を、下地の布を縫いつけていくのだが、縫いつけた絵柄の内側にも、アウトラインにも1センチほどの間隔で約２ミリのステッチを幾重にも刺していく。ダブルベッドのベッドカバーを作る場合、１日８時間かけても完成までに半年かかるものもある。デザインが 2 １年かかることもある。想像するだけでも気が遠くなる。

ホノルルでハワイアン?キルトのトップ?キルターとして 3 ナラニさんだ。ナラニさんは、祖母の後を受け継いだ。祖母は、今から30年ほど前、56歳のときにハワイアン?キルトを創作し、広めたデボラ?カカリアさんである。ナラニさんにとって少女時代からデボラさんは自慢の祖母だった。今では針を持つこともままならなくなった 4 に代わり、独創性を加味した作品を手掛けながらホノルルにあるビショップ?ミュージアム内の教室で生徒さんたちに 5 を教えている。招かれて海外で教えることもある。世界各国にいる生徒数は3000人にも及ぶ。

（としひろ桂子　『祖母の意思を一針にこめるトップ?キルター』による）

１

１　目に余る　　　２　目がない　　　３　目にする　　　４　目が回る

２

１　開発すれば　　２　複雑ならば　　３　つまらなければ４　用意されたら

３

１　頭が下がっている　　　　　　　　２　歯を食い縛っている

３　心を打たれている　　　　　　　　４　名を馳せている

４

１　お土産屋さん　２　少女　　　　　３　祖母　　　　　４　生徒

５

１　キルト作り　　２　無地の布作り　３　絵柄作り　　　４　ホノルル作り

答案：3 2 4 3 1

（10）

２月、スキーシーズンまっただなか。各地のスキー場は多くの人でにぎわっている。この時期、たくさんの雪が降るほど、山の暮らしはにぎやかに、そして豊かになる。 1 、日本にスキーというスポーツが入ってくる以前の、雪におおわれた山に住む人々はどうだったろう。ひたすら雪が溶ける春を待つばかり。雪が降ったと大喜びするのは犬と子どもくらいのものだった。

そんな雪山に暮らす 2 を一挙に変えたのが、オーストリア軍人?テオドール?エドラー?レルヒ少佐だった。

「メートウル　スキー」というかけ声とともにレルヒ少佐は新潟の高田で、日本人に初めて 3 。1911年のことだった。当初は高田十三師団の軍人に教えたが、またたく間に学生や子ども、女性にまで広がっていく。その指導ぶりは「熱心で、懇切丁寧、 4 率先垂範」だったという。その結果、それまで冬の間、ひっそり静まりかえっていた上越の金谷山や、翌冬、赴任した北海道の旭川は、突如として、多くの人で 1 いく。

１

１　そのため　　　２　および　　　　３　だが　　　　　４　結局

２

１　オーストリア人の生活　　　　　　２　日本人の生活

３　軍人たちの生活　　　　　　　　　４　女性たちの生活

３

１　冬を乗り越える　　　　　　　　　２　スキーを教える

３　雪を観察する　　　　　　　　　　４　山を楽しむ

４

１　女っぽい　　　２　日本人みたい　３　プロなみ　　　４　軍人らしい

５

１　喜びするようになって　　　　　　２　快く入れるようになって

３　にぎわうようになって　　　　　　４　図られるようになって

答案：3 2 2 4 3